

課題

時計

# 薄茶色の瞳

人物

青沼喜代美 (29)

青沼澄人 (30) 喜代美の夫

坂本桃子 (55) 喜代美の母

坂本良治 (57) 喜代美の父

坂本葵 (26) 喜代美の妹

真田友三 (83) 喜代美の祖父

看医院  
護師長  
士

○青沼家・リビングダイニング（朝）

大きなお腹をさすりながら青沼喜代美  
(29) が一続きの居間とキッチンを行つたり来たりしながら片付け物をしていく。喜代美の後ろを、青沼澄人(30) が金魚の糞のようにまとわりつきながら、おろおろしている。

喜代美 「来たよ来たよ、あたたた・・・時計見て！何分おきになった？」

澄人 「あつ。まだ10分しか経ってない。間隔狭まって来てる。やばいよ、もう生まれるんじゃないの？」

喜代美 「まあだまだ。愛子の時にはさ、早く病院に行きすぎて疲れて懲りたのよ。だから今回はぎりぎりまで家にいたい。家事とかやってる方が気が紛れるし」

澄人 「俺は気が気じゃないよ。頼むよ」

喜代美 「わかった。じゃ5分間隔になったらすぐ出発するから。用意は完璧だし。愛子は青沼のおばあちゃん家でお泊りちゃん

とできるかなあ。それにしてもおじいちゃん  
の危篤と私の出産が重なるなんて。家の  
実家はてんやわんやよ。おじいちゃんに会  
いに行きたいな・・・」

澄人「二人目のひ孫に会わせてあげたいよね。  
間に合うといいね」

喜代美「ほんとに。うっ、痛っ。んーんっ！」

澄人素早く時計を見る。

澄人「わっすでに5分間隔。もう行かなきゃ」

お腹を押さえて唸っている喜代美を尻  
目に、澄人がソファアの横に置いてあ  
るいくつかの荷物をかき集める。丸ま  
っている喜代美をよいこらしよと起こ  
し、肩を貸しながらゆっくりとリビン  
グを出てゆく。

○アパート・メゾンドポワール前（朝）

澄人が荷物を車の後部座席に置いてい  
る。助手席に座っている喜代美の表情  
がゆがむのが、フロントガラス越しに

見える。車が動く。車の後ろ姿が小さく  
なつて行く。

○里中大学病院・ナース室隣・特別病室

静かに扉が開くと、坂本葵(26)が頭を  
ひよっこり出し、きよろきよろとする。

坂本桃子(55)の後ろ姿に気づき、病室  
に入ってくる。座っている桃子の前に  
は真田友三(86)が、ベッドで酸素マス  
ク、点滴などにつながれて眠っている。

葵「いつもの302号室に行ったらおじいち  
やんいないからびっくりしちやつた」

桃子「様態が悪化した人は、ここに運ばれて  
くるみたいよ」

葵「で、お医者さん、どうだつて？」

桃子「ひとつの峠は越して今小康状態だつて。  
お父さんもあと30分位で来るってさつき  
メールがあつた」

葵が腕時計に目をやる。

葵「てことは、十一時過ぎだね。ね、お姉ち

やんさあ、お産進んでいるかな。この病院の産科にいるんでしょ？人生の終焉と新しい命の誕生か・・・なんか複雑だな」

桃子「私もね、なぜ同じ時期にと思ったわよ。でもここ2、3日の間にね、生まれることと死ぬこと、生と死を公平に見られるようになった気がするわ。誕生はもてはやされ、死はやたら忌み嫌われているわけでしょ？世の中では・・・でもよく考えたら両方ともとても自然な現象じゃない？」

葵「えーやっぱり始まりは輝かしいよ。女の子なんだよね。愛も妹がいつて言ってた。私も姪っ子ふたり両手に携えて動物園行くのが夢なんだ」

桃子「姉の子じゃなくて、自分の子供の夢を語ったらどうよ」

葵「いいの。まだ結婚したくないの。影も形もない子のことなんて想像できないよ」

カツカツカツという足音の後に扉が開く。坂本良治(57) が病室に入ってくる。

坂本「お義父さん、まだ意識がもどらないのか？」

うなづく桃子。

桃子「もう一度だけでいいから、父さんの茶色い瞳を見たいな。無理かしら」

坂本と桃子と葵が静かに眠り続ける友三を覗き込む。安らかな表情で眠り続ける友三。

○ 里中大学病院・産科病棟・外来診察室前  
喜代美が診察室前の廊下でしゃがみこみ、うんうんうなっている。その横で澄人が喜代美の腰をさすっている。カルテを脇に挟んだ看護師があわてて喜代美に近づく。

看護師「おうち出るとき何分間隔だったの？」

澄人「あ、陣痛ですか？ 5 分間隔です」

看護師「はあっ？ 何でもっと早く来ないの。」

ほら歩ける？ 診察室入って」

残された澄人がお腹の大きな女性の中

に一人居心地悪そうに座っている。診察室のドアが開く。喜代美が看護師に抱えられながら出てくる。あわてて喜代美のもとに駆け寄る澄人。

澄人「どうだった？」

口を開こうとする喜代美を遮って看護師が口早に言う。

看護師「どうだった・・じゃないですよ。すでに8割がた子宮口が開いています。すぐにも分娩室に移動です。旦那さんは付き添われますか？」

澄人「いえ、外で待ってます。すみません」  
別の男性看護師が車いすを運んでくる。促されて喜代美が車いすに座る。澄人が車いすを押しながら、男性看護師の後をついていく。3人が廊下の角を曲がる。がらんとした廊下が残る。

○同・ナース室隣・特別病室

桃子が花瓶の花の花がらを摘んでいる。



上着のポケットに視線を落とす。

桃子「あ、電話だわ」

桃子、上着のポケットから携帯を取り出す。

桃子「澄君だわ。大変、生まれたのかしら」  
急いで廊下に出る桃子。

○同・特別病室外廊下

桃子「よかったあくおめでとう！え？ウソ、男の子だったの？それはそれはまあまあ・  
・。で、母子ともに元気なのね。あくほつとしたわく。おじいちゃんの様子見ながらすぐにそちらに行くわ」

○同・産科病棟・501号室

喜代美がガウンを着てベッドの端に座りにこにこしている。視線の先には小さな新生児用ベッドの周りを坂本、桃子、葵、澄人が囲んでいる。

坂本「赤ん坊にしてはずいぶんと顔立ちがは

つきりしているじゃないか」

桃子「やだわ・・すでにじじバカじゃないの。でもほんと目がきれい。瞳が茶色だわ。

父さんとおんなじ・・」

喜代美「ね、おじいちゃんに会わせてあげたいな。先生に頼んでみる」

葵「それは無理っぽいね」

喜代美「うん。でも一生懸命頼んでみる」

赤ん坊が突然泣き出す。喜代美が赤ん坊を抱きあげトントンとお尻を優しくたたいてあやす。赤ん坊が泣きやむ。閉じていた目が開く。

喜代美「ほんとにおじいちゃんの瞳だ・・」

### ○同・産科病棟・廊下（朝）

医師3人看護師が4人が一人の医師を筆頭に廊下を闊歩している。看護師の一人が「院長の回診ですよ」と隣の部屋で入口で言っている。

○ 同・産科病棟501号室

喜代美がベッドで体温を測っている。

看護師のひとりが部屋を覗き込み、

「院長の回診ですよ」と声をかける。

最初に扉に一番近いベッドの喜代美の所に医師軍団が近づいてくる。院長がカルテを見ながら喜代美に話しかける。

院長「青沼喜代美さんですね。産後一日経つて調子はいかがですか？」

喜代美「切開の後とお尻が痛いですが、あとは順調だと思います」

院長「ひどければ軟膏と痛み止めをだしますが、数日様子をみましょう。ドーナツ型のお座布団をあとで持たせますから使ってみてください。あ、おじい様のこととは聞きました。あと二日赤ちゃんが順調だったら、5分だけ面会を許しましょう」

喜代美「ありがとうございます！」

○ 同・特別室・(夕)二日後

友三のベッドの周りに医師と看護師二人があわただしく動いている。少し離れたところで坂本、桃子、葵、澄人、そしておくるみにくるまれた新生児を抱いている喜代美が立っている。医師が振り向く。

医師 「最後のお声かけをなさってください」  
5人が友三に近づく。

桃子 「おとうさんおとうさん、桃子よ。今までありがとね。みんないるよ。ひ孫ももうひとり生まれたのよ。男の子よ。もう安心してお母さんの所へ行ってちょうだい。」

桃子がわっと泣き崩れる。その時赤ん坊が火のついたようにおぎやおぎやあと泣き出す。泣きわめく赤ん坊を抱きながら喜代美が友三に近づく。

喜代美 「おじいちゃん・・・」

赤ん坊は元気よく泣いている。その時友三の瞼がふわりと開く。茶色い瞳が赤ん坊を抱く喜代美を見つめる。笑顔

のような柔らかな表情のまま再び目を閉じる。

心拍を刻んでいた機械音が止まり、ピットというブザー音に変わる。

医師が近づき友三の瞳孔を調べ、自分の腕時計を見る。

医師 「16 時 53 分ご臨終です」

葵がおじいちゃん、と言って駆け寄る。

呆然と立ち尽くす喜代美の腕の中で、顔を真っ赤にした赤ん坊が、いよいよ元気な声で泣いている。

完